

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

鳥山孟郎先生

日時：2021年10月10日・
11月14日

場所：神奈川県川崎市麻生区
聞き手：茨木智志・大木匡尚

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を中心として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、鳥山孟郎（とりやま たけお）先生がお引き受け下さった。鳥山先生は1941年2月東京のお生まれで、静岡県の現在の浜松市で小中高校時代を過ごされた。大学卒業後の1963年に愛知県立高校に就職し、1975年からは東京都立高校に移られて、2001年に退職された後は大学の非常勤講師をされてきた。その間に、民間教育団体を通じて歴史授業、特に世界史授業の検討を進められ、多くの歴史教師の支持を得ている。

以下は、鳥山先生のインタビューの記録である。

1. 生い立ち

— 本日は、よろしくお願いいたします。お生まれは東京と伺いました。

1941年2月9日に東京の大田区で生まれたらしいのですが、自分では知りません。自分自身としては、静岡県の浜名湖に弁天島という島がありますけど、そこが最初の記憶です（現・浜松市）。数えの4歳のときになります。

— 1944年ごろですと、戦争中ですから疎開でしょうか。

東京の北樺太石油会社で勤めていた父が結核になり、仕事ができなくなって弁天島のほうに引っ越したのだと思います。父の一族は、以前は浜北と呼ばれていた天竜川沿いにいましたので。

— 1945年8月15日のことは覚えていますか。

8月15日のことは全く覚えていませんが、空襲があったことは記憶しています。海上から米軍の艦載機が爆撃をしに来るのですが、「来た」というので、近所の人に付いて行って防空壕に逃げる、そういう記憶はあります。

— 1947年4月に小学校に入学されています。ちょうど国民学校から小学校に変わったときで、その9月から社会科が始まったときでもあります。

弁天島のすぐ東の舞阪^{まいさか}小学校¹に入学しました。当時は舞阪町でしたが、今はそのへん全部が浜松市になっています。社会科のことは記憶にありませんね。親の都合で、半年くらいで舞阪小学校から積志^{せきし}村の積志小学校²に移り、3年生の3学期から浜松市内の元城^{もとしろ}小学校³に行き卒業までいました。

— 中学校は1953年4月入学かと思います。学習指導要領では分野別の社会科になった時期になりますが。

中学校は、浜松の中部中学校⁴です。社会科は全然覚えていません。むしろ中学校のときは近くの本屋で、幡随院^{ばんずい}院長兵衛^{いんちやうべえ}とかの講談本を立ち読みしていました（笑）。

— 1956年4月に高校入学かと思います。高校はどちらでしたか。また、1955年から社会科社会・日本史・世界史・人文地理となっていた時期になります。

浜松北高校⁵です。中部中学校の近くの高校になります。社会科は、1・2年必修で3年選択でした。社会科社会は記憶がないのですが、日本史・世界史・人文地理はやり

¹ 浜名郡舞阪町立舞阪小学校：現在の浜松市立舞阪小学校（静岡県浜松市西区）。

² 浜名郡積志村立積志小学校：現在の浜松市立積志小学校（静岡県浜松市東区）。

³ 浜松市立元城小学校：2017年に北小学校と統合して閉校し、中部小学校として、小中一貫校である浜松市立浜松中部学園（静岡県浜松市中区）に包括されている。

⁴ 浜松市立中部中学校：現在は、浜松市立浜松中部学園に包括されている。

⁵ 静岡県立浜松北高等学校（静岡県浜松市中区）。

ました。1年で人文地理、2・3年で日本史・世界史であったと思います。

- 浜松北高校は伝統校のようですので、受験勉強は大変だったかと思いますが、いかがでしたか。また、高校では部活動は何かされていませんか。

まあ、一応、進学校ですね。中学に入ったときから、親が塾を見つけてきて英語と数学をずっと習ってきていました。もともと旧制中学校（静岡県立浜松第一中学校）で、女子は1クラスに10人足らずしかいなかったと思います。高校では弁論部に入りました。

- 弁論部の活動や入部した動機についてお聞かせください。

多数の人の前に出て、しゃべることが恐かったので、しゃべれるようになりたいということで弁論部に入ったわけです。中学のときのクラブ紹介で、話す内容を書いた原稿を放送で読もうと思いましたが、マイクの前であがってしまって、うまくできなかったことがありました。何とかしないと、ということで弁論部に入りました。第一希望はテニス部でしたが、希望者が多くて駄目でした（笑）。

あちこちで高校生弁論大会がありました。一応、審査員がいて点数をつけます。地元でもありましたし、遠くは山梨まで行きました。内容は、あまり覚えていませんが、社会的な問題とかではなく、高校生の心構えとか、こう在りたいとか、というものであったと思います。

2. 東京教育大学文学部日本史学専攻

- 1959年に東京教育大学⁶文学部に入学されましたが、教職志望ということで教育大であったのでしょうか。

教職志望だから教育大だとか、教育大だから教職志望とか、そういう意識は全くなかったです。国立大学で、東京教育大学でなければ浜松にある静岡大学教育学部という感じでした⁷。実は、一番好きな教科は数学でした。ところが、当時は色覚の特性から「理系は駄目だ」と誰からも言われて、理系をあきらめました。

⁶ 東京教育大学：東京都文京区に本部を置いた国立大学。現在は筑波大学となっている（茨城県つくば市など）。

⁷ 当時の国立大学は、受験日程により一期校と二期校に分けられていて、2つの大学を受験するのが通常であった。また、1965年まで浜松には静岡大学教育学部浜松分校が置かれていた。

— 鳥山先生は世界史教育で活躍されていますが、日本史学専攻であったと伺いました。なぜ日本史学専攻を受験されたのでしょうか。また、社会の受験科目は何でしたか。

高校の世界史の先生が全く駄目な先生で、日本史の先生のほうが授業もちゃんとやって面倒見のいい先生でした。だから歴史と言えば、日本史という感じで、世界史という考えは出ませんでした。受験は日本史と世界史でした。

— それで、東京に移られて入学して、となるわけですが、指導の先生はどなたでしたか。

東京に来て、大学の寮に入りました(桐花寮)。日本史は18人でした(定員20名)。教育大には担任がありましたが、家永三郎⁸さんと津田秀夫⁹さんであったと思います。近世史の演習があって、関東地方の村落の演習がありました。それで、津田さんは一番身近な先生になりました。4年になって卒論の指導は大江志乃夫¹⁰さんがやってくれました。ただ、指導と言っても、勝手に書いて、勝手に出しただけです(笑)。

— 卒論はどのようなテーマでしたか。

韓国の京釜鉄道についてです¹¹。植民地化が進んだ時期の鉄道建設です。朝鮮の植民地化のことに興味があったのでしょうか。

— 学生のときの生活についてももう少し伺います。60年安保のころになりますが、どのような関わりがありましたか。また、サークル活動などには参加されていたでしょうか。

国会前にはしょっちゅう行っていました。デモは自治会単位です。学部ごとに自治会がありました。一度は国会の入口の門の中にも入りました。「あまり先に行くと、や

⁸ 家永三郎：1913～2002年、日本思想史。

⁹ 津田秀夫：1918～1992年、日本近世史。

¹⁰ 大江志乃夫：1928～2009年、日本近代史。

¹¹ 「朝鮮植民地化の一契機としての京釜鉄道」(『学内消息』『史潮』第82・83合併号、大塚史学会、1963年5月、132頁)。京釜鉄道は、日本資本の京釜鉄道株式会社により1908年に全通した京城(ソウル)・釜山間の鉄道。現在の韓国鉄道公社京釜線。

ばそうだ」と引き返しましたが(笑)。教育大は反主流派で、過激なことはやっていませんでしたし、どちらかと言うと、みんなに付いて行っていただけですね。3年のときだったか、基地闘争で新島^{にいじま}に2週間ほど行ったことはありました¹²。

入学してから4年間、八千代町セツル(セツルメント)に参加していました。大学の中のサークルです。文京区の八千代町¹³というところで、小学生を集めて勉強を教えていました。家庭教師を集团的にやっているような感じですよ。途中から、印刷関係の工場の労働者と文化活動をするというようなこともありました。家内とは八千代町セツルで一緒でした。

3. 愛知県立高校での教員生活

— 1963年に大学を卒業されて、すぐに教職につかれたのでしょうか。先ほど教職は特に考えていなかったという話でしたが。

卒業して愛知県の教員になりました。教育実習は附属の坂戸¹⁴に行きましたが、どうしても教員になろうという気は全然なかったですね。企業に行きたいとか思ったことはなかったし、周りが教員になっていくのが普通だったので、だから流れに乗ってです(笑)。

もともと家が浜松ですから、家から近いほうが良いという単純な理由で、静岡県と愛知県の教員採用試験を受けました。それで、先に合格通知が来た愛知県の教員になりました。

— 愛知県では、どちらの高校にお勤めでしたか。

最初は、木曾川高校¹⁵です。名古屋の北に尾張一宮^{いちのみや}というところがあって、そこから木曾川のほうに行く途中にあります。希望したのではなく、そこに回されたというわけです。愛知での終わりの3年間は西尾高校¹⁶でした。

¹² 新島基地闘争：新島ミサイル闘争、新島ミサイル基地化反対闘争などとも。東京都新島における防衛庁のミサイル発射試験場をめぐる反対闘争。1962年に設置された後も訴訟が継続した。現在は防衛装備庁の航空装備研究所新島支所。

¹³ 1964年まで存在した町名。現在は小石川と白山の一部となっている。

¹⁴ 東京教育大学附属坂戸高等学校：現在は筑波大学附属坂戸高等学校(埼玉県坂戸市)。

¹⁵ 愛知県立木曾川高等学校(愛知県一宮市)。

¹⁶ 愛知県立西尾高等学校(愛知県西尾市)。

— 採用試験は日本史で受けて日本史の先生になったということでしょうか。1970年から世界史を担当するようになったと、お書きになっています。鳥山先生は世界史の教員という印象が強いのですが。1970年から世界史に移ったということですか。

そうです。日本史でした。木曾川高校で最初は日本史で、3年目くらいからかな、世界史を担当してみたら、それも面白かったから、それでそのまま世界史のほうで(笑)。世界史は、たまたまやってみたら面白かったということですね。

— 1970年から世界史を教えて、吉田悟郎¹⁷先生の2冊の本¹⁸から世界史の勉強が始まったとお書きになっていて、はじめは自分の授業と結びつかなくて、ともお書きになっています。

世界史を教えるときに、どのようにやったらいいのかと思って読んだのでしょうか。吉田さんの考え方を僕が理解できるようになったのは、だいぶ先です。東京に転勤してきてから、吉田さんたちがやっている歴教協(歴史教育者協議会)の研究会があって、そこに顔を出して話を聞くようになってからです。

— 愛知にいらしたときに歴教協や他の研究会はありましたか。

ええ、やっていましたよ。歴教協のもあったし、自分たちのもありました。前に目録(「鳥山孟郎先生著作目録(稿)¹⁹」)をいただいたけど、調べてみたら、それより前に書いたものが出てきました。「岩田一久」(いわた かずひさ)の名前で書いています。

— (ファイルを)拝見します。1963年から1976年にかけて岩田一久もしくは鳥山孟郎の名前で『歴史地理教育』(歴史教育者協議会)や『歴教協あいち』(愛知県歴史教育者協議会)などにお書きになっています²⁰。どういう経緯で「岩田一久」とし

¹⁷ 吉田悟郎：1921～2018年、世界史・世界史教育。

¹⁸ 吉田悟郎『歴史認識と世界史教育』青木書店、1970年。同『歴史認識と世界史の論理』勁草書房、1970年。

¹⁹ 「鳥山孟郎先生著作目録(稿)」：聞き手が作成したもの。最初の著作を、鳥山孟郎「生徒の現実から出発する世界史—工業高校の授業のなかで」(『歴史地理教育』第276号、1978年4月)としていた。

²⁰ 以下の通り。岩田一人(一久)「第二分科会で印象に残ったこと三点」『歴史地理教育』第90号、1963年10月。岩田一久「歴史的認識の本質をふまえた歴史教育をめざして」『歴教協あいち』第6号、1967年10月。同「歴史的認識の本質をふまえた歴史教育をめざして(続)」『歴教協あいち』第7号、1967年11月。同「明治百年についての高校生の理解とその問題点」『歴教協あいち』第11号、1968年5月。同「歴史教育における自発的主体的認識のためのすじみち 日本史C 第三分科

たのですか。

教員になって愛知県に行ったばかりで様子がよく分からず、歴教協に参加していることをあまり周りに知られたくなかったので、ペンネームを使いました。自分で考えて、一番ありふれた名前にしました。愛知県歴教協は例会に3~4人しかいなくて、数人の年取った先生がやっていた感じでした。そこに参加している〈新入りの変わり者〉がいるという感じを避けたかったわけです（笑）。

あまり例会がなかったから、歴教協とは関係なしに、同年代の仲間を集めて勝手に勉強会を月1回でやっていました。そちらのほうが主でしたけれども、記録は残っていません。

4. 東京都立高校への転勤

— 1975年に愛知から東京に転勤されて、以後は定年までお勤めになってと伺いました。

同じく愛知県に勤めていた家内が愛知県で盲教育をやろうと思ってもやりたいことはできない、それは期待できないということが分かり、採用試験を受けて移ることにしました。東京に移る前の年には、埼玉や神奈川を受けましたが、駄目でした。愛知県教育委員会から送られる履歴書には毎年のストライキの懲戒処分が書かれていましたので。神奈川は何の音沙汰もなく、埼玉は2次試験の面接に行ったら、「なんでストに参加したのか」と聞いてきました。東京は自分の書いたものだけでよかったです。

採用試験は日本史で受けました。世界史で受けると何が出るか分かりませんからね（笑）。日本史のほうが確実に合格できると考えました。それで、35歳のときに東京に転勤しました。

— 東京ではどちらにお勤めになりましたか。

会『歴史地理教育』第148号、1968年10月。鳥山孟郎「第四分科会 小中高大で戦争をどう教えるか」『歴教協あいち』第22号、1969年9月。岩田一久「歴史の授業の中で、生徒相互の討論を組織するためにどのような方法があるか」『歴教協あいち』第30号、1971年1月。同「朝鮮についての本を読ませてみたら」『歴教協あいち』第34号、1971年11月。同「世界史の授業に読書指導をとり入れた一つの試み」『あいち歴史教育』第3号、1973年1月。同「近・現代史でこそ、郷土の史料の活用を」『歴教協あいち』第48号、1976年1月。

最初は、^{きぬた}砧工業高校²¹に4年、そして^{いなぎ}稲城高校²²に4年、町田高校²³に12年、最後に新宿高校²⁴に6年で2001年に退職しました。

5. 東京都歴史教育者協議会世界部会などへの参加

— 東京に来られてからすぐに東京歴教協の世界部会に参加されたのですか。

顔を出していましたね。歴教協は愛知にいたときから知っていましたから。顔を出しはじめたころは、「いったい何をやっているんだ」という感じで、全く理解できませんでした(笑)。授業の形として整理された状態で話がされているのではなくて、何かこうまとまりのない話ばかりするみたいで、という印象でした。はじめは中身よりもそういう場所に行って、みんなの実践や考えを聞きたいというのが一番大きいですね。

— 鳥山先生が保存されている「世界部会ニュース²⁵」を見ますと、毎回の例会の内容が記録としてまとめられて、次回の日時・会場・テーマが記載されています。ファイルにあるのは1975年5月のNo. 10のニュースが最初になります²⁶。記録の分担者の違いは記名や字の違いでも分かりますが、「記録・鳥山」は1976年9月11日のNo. 20が最初ようです。例会は定期的に開かれていたのですか。また、ニュースは参加者に郵送されていたのですか。

例会はだいたい月1回だったと思います。ニュースは郵送でしたかね、来た人に配布していたのかなとも思います。

— ニュースのNo. 47(1979年5月12日)から、連絡係が「笠原十九司 東大附高」から「鳥山孟郎 稲城高」に代わっています。例会は、個人の報告の他に、参加者による特定のテーマの議論や書籍の合評、それから巡検などもあって、討論も含め

²¹ 東京都立砧工業高等学校(東京都世田谷区):玉川高校と統合合併して2007年に閉校し、現在は東京都立世田谷総合高等学校(東京都世田谷区)。

²² 東京都立稲城高等学校(東京都稲城市):南野高校と統合合併して2004年に閉校し、現在は東京都立若葉総合高等学校(東京都稲城市)。

²³ 東京都立町田高等学校(東京都町田市)。

²⁴ 東京都立新宿高等学校(東京都新宿区)。

²⁵ 鳥山氏が保存している「(歴教協東京)世界部会ニュース」はファイルで3冊。当初はB4判わら半紙に手書きのガリ版刷りで始まっている。

²⁶ 収録された最初のニュースは1975年5月10日で「No.」の数字は空欄であるが、次号(1975年7月9日)は「No. 11」となっている。

て記録されています。特に討論が非常に盛り上がっている様子が伝わってきますが、人数が集まらない苦勞も見てとれます。鳥山先生の報告もたくさんあります²⁷。ファイルにあるのは1994年6月のニュースが最後ですが²⁸、この頃まで参加されていたということですか。

いや、2000年代までは参加していたはず²⁹。今は、他のものも全部一切やめています。

— 世界部会に参加された当初のことに話を戻します。世界部会は鳥山先生の世界史授業にとって大きな意味があると存じますが、ここで初めて鈴木亮³⁰先生や吉田悟郎先生とお話するようになったのですか。

そうです。研究会に出かけていってですね。やはり、鈴木さんや吉田さんとのつながりが、こちらがものを考える上では一番大きな影響を受けていますよね。それ以前に比べると、本当に思いもよらない新しい見方だったわけですから。

— 鳥山先生は何度か「世界史は世界とのつきあい方の学問だ」という荒井信一³¹先生の言葉を取り上げています。そして「どこかに正しい世界史というものがあるのでなくて、世界史は各人が自分をとり巻く世界の現実と向きあうなかで姿を現してくるものだ」という考え方である³²と説明し、また、「世界の各地域・各国の相互関

²⁷ 鳥山氏の報告は次の通り（報告日と題目）。1977年3月12日、世界史教科書の自主編成。1978年10月14日、実教出版『高校世界史』の批判・検討。1982年7月9日、産業革命と世界史の授業（世界史講座第2回）。1985年7月14日、世界の学習をめぐる諸問題と当面の課題。1986年5月30日、私にとってのインド。1989年2月4日、戦後世界史の授業例。1990年3月17日、テキスト報告 山口定著『政治体制』（現代世界の課題を探る、第3回、現代の革命と戦争を見直す）。1991年2月8日、19世紀からはじめる世界史の授業—19世紀の歴史（世界史授業実践報告、現代史をこう教えた、第1回）。同年3月1日、19世紀からはじめる世界史の授業—19世紀末、帝国主義からロシア革命（同、第2回）。同年4月26日、19世紀からはじめる世界史の授業—第二次世界大戦前後（同、第3回）。同年5月24日、19世紀からはじめる世界史の授業—1960年以後の世界（同、第4回）。1992年6月5日、いま、世界史をどう見るか。1994年3月16日、「音」教材の授業での利用の仕方（第2回）。

²⁸ 「歴教協東京 世界部会ニュース」は1986年7月15日のNo.105で「休刊」となるが、1987年12月に研究会が新宿高校を会場に「再出発」して、「世界部会News」再建第1号が1988年1月に発行されている。鳥山氏所蔵の3冊目のファイルには第40号（1994年6月27日）まで収められている。

²⁹ 東京都歴史教育者協議会の世界部会は、現在は日本史部会と合同して歴史部会として開催されている。

³⁰ 鈴木亮：1924～2000年、世界史教育。

³¹ 荒井信一：1926～2017年、西洋史・近現代史。

³² 鳥山孟郎『授業が変わる世界史教育法』青木書店、2008年、254頁。

係が深まるにしたがって、ますます重みをもつようになってきている³³」とも評価されています。この考え方でしょうか。

世界部会に出て話を聞いていく中で、そうなのだなということが分かってきました。それが1980年代ですね。1981年だったと思いますが、吉田さんと二人で会ったときに、「…ですよ」と問うと、「その通り」と言われたことをよく覚えています。

1970年代後半が自分の中で考え方の整理が一番つかない段階で、そこから80年代に入るところに世界部会とかいろいろな研究会の中でできあがってきたという感じですね。80年代後半くらいからは、自分で意識して、だいたいその後に考えている授業のスタイルに近づいているのだと思います。稲城高校の頃が一番自分の中での試行錯誤の時期ですね。

そうして、80年代には今の考えになりますが、それまでは、とんでもないことを考えていました。

— それは、どのような考え方であったのでしょうか。

例えば、発展段階説、奴隷制から近世・近代というような。それから地域ごとの文化圏学習とか、そういうような大雑把な、そういう類のもので世界史をやろうとしてきたわけです。自分の中では、歴史は因果関係を説明するものと思っていたこともありました。

— 鳥山先生の本が書かれた「因果関係を説くことはやめよう—歴史研究と歴史教育の違い³⁴」を強烈な印象をもって読みました。

これでは駄目だという感じで書いた文章です。70年代くらいまでは因果関係を追求するのが歴史であるというようなイメージを持っていましたから。

— 先ほど、「80年代に入るところに世界部会とかいろいろな研究会の中でできあがっ

³³ 鳥山孟郎「歴史教育における世界史認識をめぐる諸問題」歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題—継承と展開の50年』大月書店、2017年、326頁。ここで、三木亘「世界史のなかのイスラーム世界」（上岡弘二他編『イスラーム世界の人びと1総論』東洋経済新報社、1984年、9～10頁）をこの言葉についての出典として示している。三木によれば、荒井が学生時代に「はいた」「名言」であるという。

³⁴ 鳥山孟郎『考える力を伸ばす世界史の授業』（青木書店、2003年）所収。初出は『一橋出版「世界史」執筆者交流誌ひろば』第1号、一橋出版、1990年。

てきた」とのお話でした。この「いろいろな研究会」について伺います。私（茨木）は 1980 年代後半から近現代史教育研究会と比較史・比較歴史教育研究会で鳥山先生とお会いしておりました。

近現代史教育研究会は、二村美朝子さんたちが関わって始めた私学のほうの研究会ですね。

— 近現代史教育研究会では、鳥山先生はこれまでに 6 回報告されて、論集にも寄稿されています³⁵。比較史・比較歴史教育研究会（以後、比較史）では、鳥山先生作成の会議要旨の記載されたニュースを、私は毎回郵便で拝受していました。鳥山先生は比較史の最初からのメンバーで、会のニュースも継続して担当されていたと伺っています。

そうです。はじめからです。比較史は 1982 年だったかと思います。ニュースはほとんど自分で書いていました。このニュースの形は世界部会のがあったためだと思います。

— 比較史の活動をまとめた本³⁶によると、第 1 回会議は 1982 年 12 月に開かれています。鳥山先生のファイル（4 冊）に収められている「比較史・比較歴史教育会ニュース」第 1 号は 1983 年 1 月発行で第 2 回会議の議事要点が書かれていて、最後の第 144 号は 2012 年 3 月発行で第 145 回会議要旨を内容としています。はじめは日米歴史学会議の歴史教育部会の準備のために集まって、それが研究会に発展したと聞きました。

ええ、そのときから何人かで企画して、やろうかということになって始まったと思います。そのときの顔ぶれが第 1 回の中にいます。

³⁵ 近現代史教育研究会は 1981 年 6 月に第 1 回例会を開き、2021 年 12 月現在で第 217 回例会を開催している。鳥山氏の例会での報告は次のとおり。第 32 回（1986 年 11 月）「学校教育のなかのヨーロッパ中心史観—世界史を好きになる授業—」、第 83 回（1995 年 4 月）（松本通孝・鳥山孟郎・伊藤悟）「戦後 50 年をどう考えるか」、第 131 回（2003 年 4 月）（鳥山孟郎・川上哲正）「世界史 A を、どのように、どんな内容で教えるか」、第 141 回（2004 年 12 月）「“教師による教え込み”から“生徒が自ら学ぶ”授業へ」、第 155 回（2007 年 3 月）「日米関係をどう教えるか—ペリー来航から現代まで、東京の史跡を訪ねて考える—」、第 165 回（2008 年 12 月）『授業が変わる世界史教育法』をめぐって。また、『近現代史教育研究会論集』第 1 号（2001 年 9 月）では「日露戦争を考える現代からの視点」を執筆している。

³⁶ 比較史・比較歴史教育研究会編『「自国史と世界史」をめぐる国際対話—比較史・比較歴史教育研究会 30 年の軌跡—』ブイツーソリューション、2015 年。編集委員は、鬼頭明成・齋藤一晴・鳥山孟郎・松本通孝の 4 名である。同研究会については本書を参照。

— 比較史では、おおむね隔月の会議での報告がありましたが、特に東アジア歴史教育シンポジウムを1984年・1989年・1994年・1999年と4回開催して、関連した書籍を5冊発行しています³⁷。鳥山先生はそのすべての事前の企画や事後の編集に関わっていたと思います。このシンポジウムはどのような意味があったとお考えですか。

シンポジウムは集まった人たちでやっていました。中国のことはもっぱら二谷貞夫さんを通じて、韓国は横田安司さんです。何人か、そういう人たちがいたのですね。世界とのつながりで、ものを考えるということが、すごく大事なことだと思います。思い出すのは、世界史というのは世界とのつきあい方の学問だというのが根っこにありますね。

できることなら、続けられるとよかったと思うのですが、国際会議を継続する見通しが立たなくなったので、しめくりで本にしました³⁸。編集委員の皆さんと相談しながら一生懸命やりました。印象ですけど、最近は後につなげていくような人間関係が薄れている感じがしますね。今までの人が動けなくなるとおしまい。そういう感じになってきています。

— 2012年発行の『歴史的思考力を伸ばす授業づくり³⁹』は、鳥山先生がお声がけをして始まった世界史教育研究会のメンバーによる書籍と聞いております。この研究会はどのようなものでしょうか。

世界史教育研究会は、2005年に東京学芸大学の大学院の講師を勤めたときに知り合った若い教師たちを中心に、翌年から定期的に研究会を始めました。この本の出版を一区切りとして、2012年に研究会は解散しました。

³⁷ 比較史・比較歴史教育研究会編により次の5冊が発行された。①『自国史と世界史 歴史教育の国際化をもとめて』未来社、1985年、②『共同討議 日本・中国・韓国 「自国史と世界史」東アジア歴史教育シンポジウム記録』ほるぷ出版、1985年、③『アジアの「近代」と歴史教育 続・自国史と世界史』未来社、1991年、④『黒船と日清戦争 歴史認識をめぐる対話』未来社、1996年、⑤『帝国主義の時代と現在 東アジアの対話』未来社、2002年。

³⁸ 比較史・比較歴史教育研究会編・前掲『「自国史と世界史」をめぐる国際対話—比較史・比較歴史教育研究会30年の軌跡—』。

³⁹ 鳥山孟郎・松本通孝編『歴史的思考力を伸ばす授業づくり』青木書店、2012年。鳥山氏は「第2章 当時の状況にどう対応すべきだったかを問う」の「2 十字軍の目的は何だったのか」、「歴史的思考力をめぐる諸問題」、「資料3 歴史的思考についての基準」の「解説」を執筆している。

6. 『歴史地理教育』などでの世界史教育の執筆

- 鳥山先生は、月刊誌である『歴史地理教育』に1968年～2013年にかけて、特に1978年～2004年までは年に数回、ときに連載を含めて多くの執筆をされる一方で、他の雑誌での論考、編著者としての書籍発行を継続されてきました。これらの論著について伺います。

最初の単著は、『世界の国ぐにの歴史 7 インド』（岩崎書店、1990年）ですが、どのような経緯でインドの歴史を執筆されたのでしょうか。

せっかく東京に出てきたから愛知ではできなかったことをやろうと思って、いろいろな外国語の勉強を始めたんです。朝日カルチャーに外国語の講座がありました。最初にスペイン語をやって、インドネシア語もやりました。せっかくインドネシア語をやったから、インドネシアの教科書についても書きました⁴⁰。それからヒンディー語もやりました。ヒンディー語の先生が自分の経験したこととか、いろいろ雑談しながらの面白い先生でした。1年だけ受けるつもりが10年くらい続けました。インドにも2～3回行きました。それで、（「世界の国ぐにの歴史」の）編集委員の鈴木亮さんと岡百合子さんに、「インドを書かせてくれ」と頼んだんです。

- 『世界の国ぐにの歴史 7 インド』は、王朝の変遷ではなく、見慣れない固有名詞はたくさん出てきますが、それが具体的なものから全体につながっていて、地図や挿絵、図版も工夫されているので、中学生にも分かりやすく、鳥山先生の主張されていることがインド史で表現されていると拝見しました。

まあ、研究の水準からすると全然ちがいますけどね（笑）。図版などは、インドに詳しい人に絵を頼んだり、引用もありますが、他は自分で描いたり、自分で集めた切手を載せたりしました。

- 鈴木亮先生の『ファミリー版世界と日本の歴史 第1巻⁴¹』と共通するものがあると私（茨木）は感じたのですが。

そうですね。そういう意識はなかったけれども、それまでの鈴木さんの文章とかそ

⁴⁰ 鳥山孟郎「インドネシアの歴史教科書を読む」比較史・比較歴史教育研究会編・前掲『自国史と世界史 歴史教育の国際化をもとめて』。

⁴¹ 鈴木亮『ファミリー版世界と日本の歴史 1 原始 文明の誕生』大月書店、1987年。

ういうものが印象に残っていたのでしょうかね。

— 他にもいろいろな外国語を勉強されたそうですが。

僕がやったのは成績に関係ない、お金払っての講座に行っただけですから(笑)。言葉が身につかなくても、普段の生活で気がつかないことがいろいろ身につきますよね。

— 生徒の意識や生活に結び付いた世界史ということで、教材の工夫について多くお書きになっています。その中で1994年には「実物教材の探し方・使い方(高校)⁴²⁾」で、世界史学習での実物教材の意義や取り上げ方、入手方法などについて書かれていて、人形・神像・民芸品・観光パンフレット・紙幣・国旗などが紹介されています。日本史に比べると世界史の実物は難しいと思いますが、効果は大きいですか。また、集めるようになったのはいつからですか。

授業中に生徒に見せたり回したりするのに、渡されて手にするときというのは「本物だ」と言われれば姿勢が変わりますよね。宿題でも、外国の紙幣やいろいろなものを生徒全員に一つずつ渡して調べて来いというわけです。すべて実物の類ですね。調べると言われても、絵などよりも実物のほうが、生徒には実感がこもってきますから。写真よりも実物のほうがいいですね。

集めたしたのは、詳しく覚えていませんが、1980年以降だと思います。それまでは、そういう発想がありませんでした。

— 外国の紙幣と言えば、『歴史地理教育』に「紙幣の肖像」という連載を1996年4月から1999年3月まで3年間36回にわたって執筆されています⁴³⁾。ここで取り上げた紙幣はご自分で集めたものですか。また、この長期連載はどのような経緯で始めたのですか。

集めたものです。そこにありますよ(笑)。期間を決めていたかは覚えていませんが、1年くらいは続けるつもりで始めました。誰のことが分かれば調べたはいろいろありますし、短い文章でしたから書きやすかったと思います。きっかけは歴教協の事務局での雑談から出たものだと思います。

⁴²⁾ 鳥山孟郎「実物教材の探し方・使い方(高校)」歴史教育者協議会編『あたらしい歴史教育7授業を作る』大月書店、1994年。後に、鳥山孟郎・前掲『考える力を伸ばす世界史の授業』に収録。

⁴³⁾ 『歴史地理教育』第547号(1996年4月)の「紙幣の肖像(1)アウンサン」から第591号(1999年3月)の「紙幣の肖像(36)マリア=モンテッソーリ」まで連載された。

7. 世界史の授業について (1)

- アメリカ合衆国の世界史教育についてのナショナル・スタンダード (1994 年版) を 1997 年から読み進め、その抄訳を 1999 年に冊子⁴⁴として発行されました。冊子では鳥山先生が「まえがき」を担当されています。私 (茨木) も新宿高校での会に参加していましたが、特に鳥山先生は、この中の「歴史的思考」について多くの場面で活用されていると存じます⁴⁵。

歴史的思考力というのは言葉としては皆さん使っていたけれども、歴史的思考の中身が厳密に考えられて使っていたとは限らないわけです。具体的な中身をこれだけ丁寧に分かりやすくしてあるのはなかった。それで、こういうのを見つけて、こういうのが大事だと感じました。

- 「歴史的思考」の中の特に、どの部分ですか。

良く書けていると思ったのは、この基準の3番あたりですね (歴史の分析と解釈)⁴⁶。具体的にどういうことなのかということが、割合に丁寧に書かれています。

- 『考える力を伸ばす世界史の授業』(青木書店、2003年)にある「カースト制度と不可触民⁴⁷」について伺います。私 (大木) はこういう授業がしたいと思いながら読みました。この中で『インドの大地で⁴⁸』に書かれている、取材先のハリジャン (不可触民) の家を出された飲み物を助手のバラモンの青年が飲まなかったことを紹介して、あなたがその青年の友人だとしたら、仕方がないと思うか、飲めばよかったと思うかを生徒に問うています。この2つの回答を、鳥山先生が授業では最終的にどこに持って行ったのかが気になりました。

⁴⁴ 世界史教育を考える会編集発行『“NATIONAL STANDARDS FOR WORLD HISTORY”抄訳』、1999年。

⁴⁵ 最初に取り上げたのは、鳥山孟郎「歴史教育のための全米指導基準 (NATIONAL STANDARDS) を読んで」(『一橋情報 地理歴史科』一橋出版、1998年5月)であり、鳥山孟郎・前掲『考える力を伸ばす世界史の授業』に「アメリカの歴史教育のための全国基準を読んで」として収録されている。

⁴⁶ 「歴史的思考」を基準1「年代的思考」、基準2「歴史的理解」、基準3「歴史の分析と解釈」、基準4「歴史的探究の力」、基準5「歴史的論点の分析と意思決定」という5つのタイプの技能として示している。

⁴⁷ 初出は、歴史教育者協議会編『知っておきたい インド・南アジア』(青木書店、1997年)に「授業実践」として掲載されたものである。

⁴⁸ 五島昭『インドの大地で 一世俗国家の人間模様』中央公論社 (中公新書)、1986年、72～75頁。

生徒は簡単に、インドのカーストはけしからんと非難して終わってしまいます。カーストによる差別は、とんでもない、早くやめるべきと、「飲めばよかった」と普通の日本人は言うことですが、実際にその世界に生きている人にとっては、そう簡単に言えることではない。このときの自分の気持ちとしては、そういうものではないという意味合いを感じ取ってもらうということであったと思います。簡単に日本の社会での当たり前前価値観を、そのまま、その価値観でインドの人たちのことを割り切って結論付けてしまうことは、その人のことを本当に理解できていないという意味で作ったような気がします。

— 同書には他にも「アジアの民族運動を学ぶ視点 —日本の侵略を肯定する高校生の論理から⁴⁹」などがあって、先生もこんなものばかり見せて…とか、侵略はこういう時代だったから仕方がない…とか、率直に語っている生徒が紹介されています。このような生徒たちに、鳥山先生がその後の授業の中でどのように答えていったのかも気になりました。

何も答えてはいないわけです。

— では、生徒は何を感じ取ったのでしょうか。

ですから、今の高校生にとって、その頃の人のももの感じ方と共通するものは無いわけではないというか、昔の人は間違っていたとか、けしからんとかいうだけでは済まない、自分自身の問題としてはどう考えるんだというところに気づかせようということだと思います。今ならそんなことは間違っているとってしまうのは簡単だけれども、そういう状況に置かれたら自分はどののだろうかというところに気づく、そういう必要があるという感じです。

— もし君が同じ立場だったらどう感じるだろうか、ということを考えてもらうということでしょうか。

ええ、そうです。

⁴⁹ 初出は『歴史地理教育』第450号、1989年12月。

8. 世界史の授業について（2）

- 関係していると感じたのですが、2018年の講演記録「『自分の生活と無関係な世界史』からの脱却のために⁵⁰」を拝見しました。ここで、「主体的対話的で深い学び」と最近よく言われるフレーズに対して、鳥山先生は世界史学習でも「大切なこと」としつつも、教師が押しつける課題、教師が予定する結論に至るための対話については「無視できない重要な問題」があると指摘しています。そして、「自分の生活と無関係な世界史」からの脱却のために、特に「生徒の主体的な興味や関心」を主張されていると読みましたが、歴史学習における「主体的」という点について、もう少しお聞かせください。

主体的というのは、それは昔の話だとか、今はそんなことないよということではなくて、自分がそう簡単に割り切れない、昔の話では済まない、今でも考えなければならぬ問題が起こっているという、そのようなところに主体的というのがつながってくるのではないかと考えています。

- そこを理解する、分かるというのが世界史教育の重要な役割ということでしょうか。

歴史という過ぎた昔のことをやっても、そういう場面に生徒が立った場合にどう考えたらいいか、それも簡単に結論が出せない、いろいろな意見に分かれるような問題なんだということに気がつくということ、ですかね。

- 気がつくということ、ですか。

教師のほうから結論を押しつけるような問題の出し方でなくて、生徒が考えざるを得ないようにするための問題の立て方ということではないかと思います。そう簡単にはいかない場面を作るといふか、そういうところで生徒が考えるというような場面を設定するということが必要だと思います。教師が結論を押しつけるな、ということでもあるわけですね。自分で考えさせるというわけで。例えば、日本が出兵した結果がそのときに〈そうせざるを得ない〉と思ったとしても、〈結果がどうなったのか〉と

⁵⁰ 鳥山孟郎「『自分の生活と無関係な世界史』からの脱却のために」（2018年度総会・学習会 講演）『東京の歴史教育』第48号、2019年8月。2018年度東京歴教協総会・学習会での講演の記録である。

いふこととの間の矛盾というような、そのようなものを感じることができればいいと。戦争でなくても、その時代に生きた人たちの具体的な問題状況みたいなものを、どのように取り上げていけるか、というのがあがる気がします。

要するに、結論ではなくてプロセスのほうが大切という感じになりますかね。結論を押しつけても意味がないというか。

— 1980年代に「世界史は世界とのつきあい方の学問だ」ということが分かったと、先ほどお聞きしましたが、以上のことはここに関係すると思いますけれども。

今、思い出してみても大事だなと思います。世界史学習というのは、他者とのつきあいを学ぶ学習なのだと。自分がこうだと思って、それでいいのではなく、相手とどうつきあっていくのかということ、相手のことをよく知って考えて行動する、そういうことが大事だと。

— 関連するかと思いますが、目良誠二郎先生が自分の授業で失敗した反省をもとに、暴露告発型の授業では駄目だとされました⁵¹。鳥山先生もそれを感じておられましたか。また、同様の失敗はありましたか。

どうしても、こうあるべきだという結論を教えるという傾向がありましたよね。目良さんが分かりやすく、はっきりと言ってくれたという感じがします。

— 鳥山先生は『歴史学研究』（歴史学研究会）で土井正興先生の『世界史的視野のなかの歴史教育』（日本書籍、1991年）に対する書評を1992年に書かれています⁵²。本書に一部が収録されている安井俊夫・土井正興論争⁵³について、鳥山先生は「この論争は問題の本質からはずれた不毛な議論だと思っている」、「歴史学と歴史教育との間の矛盾であるかのように見なされてしまったことは非常に残念である」と指摘されています。この指摘は、これまでのお話と関連すると感じましたが、いかがでしょうか。

⁵¹ 目良誠二郎「バクロ型の日本近・現代史授業の反省」比較史・比較歴史教育研究会編・前掲『共同討議 日本・中国・韓国「自国史と世界史」東アジア歴史教育シンポジウム記録』、など。

⁵² 鳥山孟郎「書評：『世界史的視野のなかの歴史教育』」『歴史学研究』第636号、1992年9月。

⁵³ 安井俊夫の中学校でのスパルタクス反乱（紀元前1世紀）の授業実践をめぐる、土井正興との間で交わされた1980年代後半の論争。『歴史学研究』誌上を中心に、歴史学と歴史教育の関係の議論に展開し、現在に至るまで多くの論者により様々な角度からの検討が継続している。

研究者としては歴史的事実を確定し、それらの関係性を明らかにすることが重要です。しかし、歴史教師にとって大切なことは、生徒各人が人間社会についての見方・考え方を深めていくことです。そのためには、多様な見方・考え方が尊重される必要があります。両者は矛盾しているのではなく、目的が異なるのであると考えています。

— 具体的な授業に関わって伺います。鳥山先生は、1年間の授業の中で、考える場面をどのように設定されていたのですか。

そういくつもあります。1年間で何回くらいになりますかね。3~4単位（週3~4時間）で、講義式だけでなく、グループで発表したり、問いを立てて生徒に考えさせたり、意見を書かせたり、とかやっていました。4~5時間くらいの単位で考える場面を作るとい感じですか。その前提となる事実認識が無いと判断もできないわけです。グループ発表は、まず調べるという日がありますよね。その前に、生徒がテーマを設定できるように、そのあたりの時代の概観をやるとなります。グループは4~5人でと決めてきました。全部が発表でもなくて、それを踏まえて各自が意見を書いて提出するとか、普段の授業の中で進めていました。

— 鳥山先生の出す「問い」の凄さが印象的ですが、どのように設定されているのかに興味があります。

まあ、授業を作るときに考えるということになりますが、考えざるを得ないテーマを、なるべく判断の分かれそうなところに、ですね。本では、使いやすいものを紹介しました⁵⁴。

— 考える授業に対して、生徒の反応はどうでしたでしょうか。受験生は嫌がるという傾向はありませんでしたか。また、このスタイルの授業をいつ頃から実施されていましたか。

生徒にしてみれば説明を聞いているだけよりも、やはり自分の意見を書く場合のほうが、何かしら自分で考えなくてはならないですから。受験する・しないは関係ないですね。持って行きかた次第です。受験的な勉強ばかりで嫌だという生徒もいっぱいいますから。

⁵⁴ 鳥山氏の世界史授業については、鳥山孟郎・前掲『授業が変わる世界史教育法』に自己の実践の一部が整理されて紹介されている。

稲城高校の頃から、ぼちぼちとそういうやり方を検討しましたが、始めから完成したスタイルがあるわけではないです。いきあたりばったりで、あれこれ探しているうちに見つかったものからです。町田高校に転勤した頃から、だいたい自分のパターンができあがったという感じですね。

— 著作で一部紹介されているものもありましたが、定期試験については、どのようにされていましたか。

試験については別に考えてきたつもりです。問題の作り方もいろいろあると思いますが、文章で答えるような問題をなるべく多くして、どちらかといえば、事実に基づいての自分の意見を書くようなものなどですね。

9. 一橋出版の世界史教科書

— 鳥山先生が参加されていた一橋出版⁵⁵の世界史 A と世界史 B の教科書について伺います⁵⁶。どのような経緯で執筆に参加されたのでしょうか。また、世界史 B は物語風の教科書で話題になりましたが、これは鳥山先生の構想であったと編者の二谷貞夫先生から聞いております。

もともとは二谷さんから話があって、協力しようという形で始まったと思います。執筆者を見ると、だいたい二谷さんか僕のルートで知り合いに声をかけてですね。物語風にしようというのは、編集会議で提案して了解してもらいましたが、項目とかは皆さんと相談したと思います。

— 世界史 B は、各節（全 22 節）のはじめに概観があって、そのあとに物語的なものが 3 つ並ぶという構成になっています。この物語風というのは、鳥山先生が主張される、生徒が学ぶ世界史に合致した形の教科書を作りたいということでしょうか。

⁵⁵ 2009 年まで存在した東京都杉並区に本社を置いた出版社。

⁵⁶ 二谷貞夫・笠原十九司・油井大三郎他を著者として一橋出版から、世界史 A が①『世界史 A』(世 A504、1993 年 2 月 28 日検定、1994～1997 年度使用)、②『世界史 A 新訂版』(世 A570、1997 年 3 月 15 日検定、1998～2004 年度使用)、③『世界史 A』(世 A010、2003 年 4 月 2 日検定、2004～2009 年度使用)の 3 種、世界史 B が①『世界史 B』(世 B512、1993 年 2 月 28 日検定、1994～1998 年度使用)、②『世界史 B 新訂版』(世 B616、1998 年 2 月 28 日検定、1999～2002 年度使用)の 2 種が発行された。『世界史 B 新訂版』は、後に二谷貞夫他『忙しい現代人のためのものがたり世界史 65 篇』(一橋出版、2003 年)という一般書としても発行された。

それと、前提にあったのが、概説というのではなくて、以前に書いたインドの歴史の感じのものにしたいというイメージがありました。物語とは言えないと思いますけど、要するに、今までの教科書は項目が並んでいるという感じで、因果関係でつながっていて、その先を読んでいきたいという感じにならない印象が強かったですね。自分としては世界史Bのほうに力を入れていて、自分が中心になったのはBのほうですね。気がついたら、僕が編集を進めてという感じになっていました(笑)。

— 次に、世界史Aの教科書について伺います。ちょうど「世界史A」という新科目が発売したときの最初の教科書になります。構成や内容について意識されたのはどのような点ですか。また、見開きの2ページが基本で地図や写真があって両脇に注があってという形式はその後のスタンダードになっていくと思いますが、これも鳥山先生のお考えですか。

意識的にやったのは、それぞれの項目について概説ではなく具体的に分かりやすく書くということです。2ページごとにひとまとまりの話になるという形にしました。通史という感覚よりは、一つずつの話の積み重ねというものです。世界史Aというのは、受験向けよりは、高校だけで終わる生徒を主なねらいにしてと進めていたように思います。(教科書を見て) こういう章立てとかは、僕の考えで作った感じですね。どういった教科書を使うにしても、そういう形の授業を目指していたことはありました。普段、考えていることを中心に並べてみたということです。

— 「世界史A」は単なる近現代史ではなかったのですが、この教科書では近代以前の部分をどのように描くかという部分を、実にうまくまとめていると拝見しました。「第I部 諸文明の歴史的特質」の「第1章 文明と風土」で始まり、その中で、いきなり「1 トウモロコシの文化」「2 馬と羊の文化」「3 海洋民の文化」と来ます。この点も鳥山先生のお考えが反映している部分でしょうか。

前近代の歴史で、各時代の特徴を知る上で重要な点として、一つは産業ですね、農耕とかトウモロコシとか馬とか、生産というところに視点を置いて組み立ててみたわけですね。僕自身はこれよりずっと前から歴史の発展と農業についての関わりとかは、意識的にいろいろな本を読んで勉強してきました。30歳代の頃は、歴史というのは生産力と生産手段の矛盾みたいな形で説明されることがよくされていたので、個々の個別の事件に入る前に、生産力とか生産手段の歴史をもう少し具体的に分かりやすくという気持ちがありました。それだけでは足りないと感じるようになったのが1980年

前後からですね。

- 第Ⅰ部の「第3章 インドと東南アジアの文化」で「1 輪廻と解脱の思想」「2 カースト社会における人間関係」「3 インドネシアの宗教と文化」とあります。ファイルを拝見すると鳥山先生が分担されたところですが、インドネシアを東南アジアであえて立てたのはどうしてですか。

広い範囲を概観するよりは、なるべく個別の地域ごとにイメージが持てるようにと、そういうねらいで作ってあります。東南アジアをいくつも取り上げるわけにもいきませんし。

- 同じく「第4章 西アジアとアフリカの文化」で「1 イスラム教の成立」と「2 契約と共存の社会」を分担されています。「契約と共存の社会」というところが、面白いと言いますか、普通はあまりこういう書き方はしないと思います。世界史の教育の中で、このような視点や記載が足りなかったということでしょうか。

こういう書き方はしないですね。中東の歴史をイメージするうえで大事な角度ではないかというつもりで、そのようなものを作ったと思うのですね。中東というのは、様々な異質なものが互いに契約をして、それに基づいて共存が成り立つ。両者が担いあう関係なわけです。普通の教科書を見ても全然出てこない。中東と言うのは一番イメージがわきにくいという感じがするのではないかと思います。

- 他にも現在（2021年度）使われている中学校社会科歴史的分野用の学び舎の教科書⁵⁷の執筆もされています。

はじめは編集から、それから不破修さんから声をかけられたと思います。編集そのものには携わってはいませんが、いくつかの部分を書きました。

10. 退職後の活動など

- 2001年に定年退職されてから、青山学院大学、首都大学東京（東京都立大学）、

⁵⁷ 安井俊夫他『ともに学ぶ人間の歴史』学び舎、歴史738、2015年4月6日検定、2016～2020年度使用。安井俊夫他『ともに学ぶ人間の歴史』学び舎、歴史711、2020年3月24日検定、2021年度以降使用。

東京学芸大学などで非常勤をされて、単著として2003年には『考える力を伸ばす世界史の授業』、2008年には『授業が変わる世界史教育法』（ともに青木書店）を出版されています。

大学で教えたのは2009年が最後だと思います。自分の感覚としては、一つのほう（2003年発行）は、それまでに書きたいいくつかのもので自分なりの世界史教育の考えをまとめたもの、もう一つのほう（2008年発行）は、書き下ろしで世界史教育そのものの全体のイメージを書いてみたという感じです。2003年の青い表紙のほうは、青木書店から話があって出しました。2008年のほうは、もう一つ出したいからと頼んだら、向こうがちょっと嫌な顔をしたという印象が残っています（笑）。

— 編著として別所興一・鳥山孟郎編『入門・歴史教育:授業づくりの視点と方法』（あるむ、2006年）と、先ほども伺った鳥山孟郎・松本通孝編『歴史的思考力を伸ばす授業づくり』（青木書店、2012年）が出版されていて、他にも世界史教育や歴史教育、日韓や日中の歴史教育交流に関わる多くの論考を雑誌や図書に寄せられています。

『入門・歴史教育』は別所さんから大学で使える本をという話があって、一緒に作ることになり、自分が知っている人にも頼んだ感じですね。別所さんは、愛知で一緒にやっていた古くからのつきあいです。

— 日韓・日中との交流については、比較史での活動も含めて以前から関係されていたと存じます。ご退職後ですと、『向かいあう日本と韓国の歴史⁵⁸』や「日中歴史教育交流を継続し発展させるために⁵⁹」などを書かれています。以前のことで、私（茨木）も1993年に中国旅行で一緒しました⁶⁰。

そうでしたね。中国には行きがかり上ですが、わりあい関わってきました。一番多かったのは韓国との交流でした。そういう団体もたくさんありましたから。

— ご退職後にも、世界史ひいては歴史について、著書も含めて、その授業や教育の

⁵⁸ 歴史教育者協議会・全国歴史教師の会編『向かいあう日本と韓国の歴史』青木書店、前近代編上・前近代編下（2006年）、近現代編（2015年）。

⁵⁹ 鳥山孟郎「日中歴史教育交流を継続し発展させるために」『歴史地理教育』第807号、2013年7月。2012年12月の上海での授業参観をもとに執筆されている。

⁶⁰ 鳥山孟郎「日中歴史教育シンポジウム参加記」（『歴史学研究』第656号、1994年3月）参照。

在り方や本質を問う論考を多く書かれています。2009年の講演「何のために歴史を学ぶのか⁶¹」について伺います。ここでは、歴史教育とはどういうものなのかを、(1) 生徒の心に届かない「教える」目的、(2) 歴史を「学ぶ」ことの意義を考える、(3) 歴史を学ぶ目的は、通史を知ることではない、(4) 生徒の日常生活意識を豊かにするための歴史学習を、という4つの項目で講演をされています。なかでも「歴史を学ぶ目的は、通史を知ることではない」という点が、講演後の質疑でも話題になっています。通史は駄目ということでしょうか。

通史だけでは、生徒の学習意欲を引き出すことは、むづかしいと思います。

一 通史だけでは無理ですか。

通史をドンと前に出されても、生徒は受けとめようがない、という感じがします。何かもっと自分の生活と関わってくる中での問題とつながってこない。ただ教科書に書いてあるからやっていますということですよ。自分の毎日の生活と全然関係ない。そういうことが教科書に書いてあるか、ないかというよりは、そういうことを感じ取れる場面を作らないと、という感じがします。うまく言えないのですが、例えば、簡単なことを言うと、鉛筆でもいいし、茶碗でもいいけれども、それを見て、そこで自分と関わっているものについて、何か新しいことに気がついて調べるといような、そういう形の勉強の仕方がもっとあったほうがいいのではないかと思います。

歴史という場合に、生徒が自分の日常生活の中で手近に興味を感じていることと、有為転変というか社会の動きというか、そのへんが生徒の意識の中ではうまくつながっていない。上から押し付けるのではなく、そこをうまくつながりをつけていくようなことが重要ではないかという気がします。

一 「自分の生活」ということでは、先ほども触れましたが、2018年に「「自分の生活と無関係な世界史」からの脱却のために⁶²」の講演をされています。

ですから、その生徒の生活の中から出てくる疑問に取り組むということ突き詰めていけば、もっと広い歴史につながるという面はあるわけです。それをいきなり具体的な個別の問題ぬきにしてしまって、広いほうだけをやってしまうというようでは、

⁶¹ 鳥山孟郎「何のために歴史を学ぶのか」『東京の歴史教育』第38号、2009年11月。2009年6月の東京歴教協総会・学習会での講演と質疑応答の記録である。

⁶² 鳥山孟郎・前掲「「自分の生活と無関係な世界史」からの脱却のために」。

生徒が結びつきを感じ取れない。生徒が自分の生活感覚の中で考えられる場面を作って、その中から歴史とつながるものを次の課題として出していく、そういう形でしょうか、今まで目指してきたのは。

— 教えていただきたいのですが、そういうことができるようになるために、鳥山先生自身はどういうことに取り組んできましたか。歴史の本を読んで勉強するもあると思うのですが、日常の中では。

どう言えばいいのか。自分の日常の中では、自分の生活の中から出てくる興味があるので簡単です。生徒の自分の生活の中から出てくる疑問や興味を、歴史のところに結び付けるといこうが、間にワンステップ、必要なものがあるという感じがします。だから、生徒から疑問が生まれてくるような場面をまず教室の中に、授業時間の中に作るということを、いろいろ新しく工夫したりということをしてきたような気がします。

— 2022年度から高校で実施される「歴史総合」について、どのようにお考えですか。

学習指導要領を読んだ印象としては、言葉の上ではこっちが考えていることに近いことを言っているなど思うのですが、それでは、具体的にどうするのと。結局、また押し付けになるという不安がぬぐえないという印象があります。

「歴史総合」には、生徒が自分の生活とどのようにつながるのかということが感じ取れる場面がなく、生徒が自分の生活とつながりがあるものだと自覚が持てる学習ということがあまり考えられていないのではないかと。

— 世界史教育で一番重要な点はどこにあると思われますか。

やはり世界史というと、他者との関わり方ということが重要な側面になりますし、それが日本史と違うところです。他者を見る視点、自分中心で考えるのではなくて、他者との関係を考えるという、そういう側面が世界史の場合は非常に重要ではないかと思えます。

— 長い時間、お話をお聞かせくださいまして、本当にありがとうございました。

後記

お忙しい中、二度にわたるインタビューのお願いを快くお引き受けいただき、大変に興味深いお話を聞くことができた。研究会のニュースなどの何冊ものファイル、また教科書などの分担執筆を含めて、ご自身が書かれたすべての刊行物のファイルに圧倒された。鳥山先生の取り組みの一端しか伺うことができておらず、さらに伺ったお話のすべてをまとめきれていない不明を恥じるばかりである。

最後に、原稿作成時にも多くのご教示やご協力をいただいた鳥山孟郎先生に、心から御礼を申し上げます。

(注記に関して、さまざまな文献やホームページの情報を利用させていただきましたことを申し添えます。また、関連して何人かの方々からもご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。)

(文責：茨木智志)